

世紀のはざままで

春日茂男

「世紀のはざま (狭間)」とは

いつも恩恵を受けるばかりで、私が何も語らないのは能のない話だと思ひまして、まあちょっと久しぶりでございますので、気楽なというのか、考えていることをちょっと、どちらかという疑問というんですかねえ、そういうのをみなさんがどう考えていらっしゃるのかということをお聞きしたいというふうなことを… (思ひまして)。

さて、「世紀のはざままで」という標題ですが、川端さんから「何の標題にしますか」と言われたときに、ふっと浮かんだ私の気持ちであります。「はざままで」、その次に「考える」とか「振り返る」とか何でもいいわけでございます。ですから、「はざま」っていいますと、やっぱりこう「挟まれて」ですね、自分自身の心境が多少反映されておひまして、二十一世紀に向かってという前望があつていいんですけども、「はざままで」というと、狭間にはさまれて身動きならんと言う意味合いも若干あります。若干年寄りでございますので、話の内容は「後を振り返れば」といったものでして、どうしても後ろ向きの話に聞こえるでしょうが、……。

21世紀のことはともかくとしまして、20世紀の後半50年間、だいたい私は50年間は、まあなんらかのかたちで、地理学にかかわつてまいりました。そういうわけで若干それに関しまして、考えておりますこととか疑問に思つておひすことをお話ししてですね (みなさんの考えを伺いたいと思うわけです)。ここにこういうノートみたいなものを持っておりますけど、今日のために書いたのではなくて、時々こう書いておつたものをいいかげんに持ってきたわけで、脈絡はありません。私の個人的な経験になりますので、その点はお許し願ひたいと思ひます。

地理学の戦後50年

終戦直後の日本の地理学の状態についてですね、ちょっとお話ししておきたいと思ひます。当時の地理学というもの、特に人文地理学は、再建というか戦前復帰といった状態で、新しい方向を指示するのにかなり控え目であつたように思ひますが、まあ、自然地理学のことには分かりませんが、

ちょっと飛躍しますが、50年たちましたが、残念なことに、世間における地理学に対する理解というのがあまり変わつていないというのを、私は非常に残念に思ひます。地理学を専攻する学生は非常に増えたはずでありますし、高校の教壇に立つ人も地理学を専攻した人が、非常に多くなつてはいるはずでありますけれども、しかし、世間一

般の、地理学に対する印象といいますかイメージは、ちっとも変わって……ちっともというとなればかもしれませんが、まあほとんど変わっていないといっているのだらうと思います。50年経ったけれども地理学の世間的イメージが変わらないということに遺憾に思います。

飯塚浩二と地政学

さて、私は、当時はまだ20代でありましたけれども、その世代を刺激したのは、むしろ地理学の講座の先生方というよりも、地理学に所属していなかった人たちなんです。当時、自由闊達に発言著述を展開されたその第一の人は、飯塚浩二氏でありました。その頃は、東京大学の東洋文化研究所の教授であったと思いますが、『地理学批判』（帝国書院）という本を出しましてですね、みなさんもご存じだと思いますけれども、こういう本が、戦後の混乱の、まだ空襲を受けた町が瓦礫の状態の時に出版されたわけです。昭和22年ですけれども、『地理学批判』というこの本が出版して、当時の方向を見失っておった地理学を志す若き者たちにとっては大変刺激になりました。

全面的にこれを是とするかどうかは別としまして、これは要するに環境決定論に対する批判が中心となっております。この人は、戦中に例のブラーシュ（Vidal de la Blache）の『人文地理学原理』（"Principes de geogr. humaine"）というのを訳された方ではありますが、それまでの地理学界において飯塚浩二という人の存在を知る人は実際には少なかったのであります。で、こういう方がおられるのかというような状態でありましたが、まあ、戦後にこの方がこういう本を出して、名乗りを上げられたわけでありまして。収める論文は戦前もしくは戦時中に書かれたものです。主として、ドイツのラッツェル（F. Ratzel）とか、アメリカのハンチントンら（E. Huntington）の批判をして、フランス地理学を賞揚するという立場の人であります。

その飯塚さんは、この本の最後のところで地政学の批判というのを収めておられます。地政学が批判の対象になるというのは、飯塚さんの議論を待つまでもなく、みんなほぼ意見は同じなのであります。戦後は地政学というのは葬り去られた



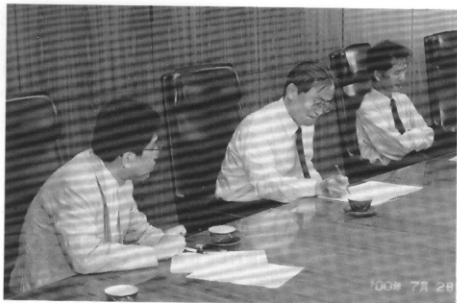
格好になっているわけでありませぬ。ご承知のように、地政学はもうタブーのように
なっているのですが、世界中そうであるかといひますと、国際政治の舞台では決してそうで
ないという実態があります。日本とかドイツとかは、その点で「義に懲りて膽を吹く」
ということばがあるけれども、そのきらいがあったわけで、その後は「Geopolitik」とい
うものを論ずる人が少なくなりましたけれども、現実においては、geopolitical なものは
死んでしまったものではないのです。かの「Geopolitik」を擁護するつもりはありません
けれども、国際政治の舞台では範囲が広い存在と言うことだけは申し上げておきたいと
思います。

ご承知のことと思いますが、『気候と文明』("Civilization and Climate") のハンチント
ン(E.Huntington)と同名の、サミュエル・ハンチントン(S. Huntington)という人が、『文明
の衝突』という本で一躍有名になりましたですね。で、この本を見るきっかけは地理学
者のそれと関係があるのかと思ったからです。なお、前者の戦後の書物は『文明の原動
力』として邦訳されていますが、後者の本はいわゆる地政学的なものであります。日本
はのんびりと、アメリカの核の傘の下で、全く「Geopolitik」というようなものを考え
ずにおれるけれども、世界の大国とかそういったものは、これを一日も欠かしたことがな
い、そういう緊張したものである状況であることを感じます。ハンチントンの本を読み
ましても、日本に対する警戒というようなものがあります。ご承知だと思いますけれど
も、今年になってまた、この『「文明の衝突」と21世紀の日本』という本が出ました。
前の『文明の衝突』は読まなくても、これを読めばだいたい重複していると思います。

ハンチントンに関して

サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』と題するこの日本訳を店頭で見て、一瞬、
「文明の原動力」からついに「文明の衝突」に至ったのかと思ったのですが、内容は全
く別の学問分野であり、かつ親子でもなさそうなので、自分が短絡的であることに苦笑
した次第です。

地理学のエルスワース・ハンチントンのこの最晩年の大著は、1945年に“Mainsprings of
Civilization”として刊行されたもので、1950年に西岡秀雄という人が翻訳されました。
細かい活字で600ページを越えるもので、いま一寸読み直そうとしても、字が細かく
て紙も悪いので、なかなか困難であります。しかし、表題が魅力的であったので、出版
された当時購入して読みました。全部読んだかどうか覚えていません。彼の基本的な考
えは『気候と文明』からさほど変わっていないようで、前世紀の「人種主義」を引きず
っているように見えます。彼は年輪分析による過去の気候の変動を世界の各地で調べて
おり、気候脈動説というようなものを唱えましたが、人種の優劣というような考えは首
肯しがたいものです。非常に多くのデータや文献を駆使したものではありませんが、文明
というものに対する考え方や環境との短絡が、評判を得るには至らなかったものと思わ



れます。

さて、国際政治学者、地政学者のサミュエル・ハンチントンも1927年生まれとありますので、もう70歳を超えた長老です。経歴は邦訳書に譲りますが、私の手元にたまたまマース

(A. Maass) 編 "Area and Power" という1959年刊の書があり、私の若い頃注文して取り寄せた書物ですが、実はあまり読んでいませんでしたが、その中に、サミュエル・ハンチントンの論文が載っています。この"Area and Power"という書物は、幾人かの執筆者の論文から成るものですが、サブタイトルが『地方政府の理論』とあり、政治権力をいかに、地域に分割するかということで、ここに言う「power」とは、政治ないしは行政権力のことです。我が国でも今日言われている「地方分権」の論議です。著者たちは政治力をローカルに、州に、そして連邦政府に areal に分割することが、デモクラティックな社会の自由、平等、そして福祉に関して、重要で、他の研究方法によってはアクセスできない多くの問題を分析するための鍵であると主張しています。ここでのハンチントンの論文も、政治思想の中における諸力自体の座を areal に配置する問題の一環を考察しています。これと今日の『文明の衝突』とは大分スケールが違っているようで、私にはこの間の彼の著作をフォローするいとまがありません。

江澤譲爾と小原敬士

その話は別としまして、その戦後の頃ですね、私が刺激を受けたもう一つの本は、江沢譲爾氏の『地理—その基本問題』という、こんなに古くなりましたけれども、こういう書物がございます。これも古本屋で見つけた本でありますけれども、昭和18年に出ているんです。それからもう一冊は、ちょっと大きいので、持ってきませんでしたが、小原敬士さんの『社会地理学の基本問題』(古今書院)という書物であります。

この二人の先生は、たまたま東京商科大学、今の一橋大学に関係した人々でありました。大学で地理学を専攻したという人ではありませんが、地理学を担当したらしく、小原さんはどこで担当されたのか、横浜の専門学校でも先生をしておられました。で、先

の飯塚さんの本と合わせて、だいたいこの三つの書物から、地理学の問題性というものを得るところが多かったのです。

そういえば、地理学を専門にしてきた人は何も言わなかったのか、何か言っても良さそうなものだという感じはしていましたが、まあ、当時は教職適格審査とか、いろいろなことが占領軍の指令の下に行われておりましたので、かなり、慎重になっておったという状況でありました。

さて、その当時の地理学の動きとしましては、「社会地理」という名前が出てまいります。それまでは地理に社会という字をつけるのは稀でありまして、「人文地理」と「自然地理」というふうに言っておりましたが、戦後のいち早く「社会地理」という言葉が出て来ましたが、そういう雑誌も出ました。一時それも途絶えましたが。しかし、その社会地理というのは、方法論から検討して社会地理というものをうち立てたというのではなくて、従来の「集落地理学」とか、「農村地理」のようなものが、横滑りしたというようなかたちに思えました。ですから、方法論的に、基礎が社会地理というのに値したかどうかはわかりませんが、まあ人文地理を看板塗り替えたということなのか、その辺がもたもたしておりました。

当時は方法論を論じるということに慎重であったのか、あるいは何らかの理由で差し控えたのかよくわかりませんが、そういうことよりも個別研究に向かった訳であります。ですから、環境論とか方法論の旗を振るということは、むしろ飯塚浩二さんのような自信のある人でないとはできなかったことなのでしょう。ですから、「社会地理」の基本は、社会調査なんですね。基本の手法は社会調査でありました。農村調査とか、そういった本が尊重されておりました。そのうちに、アメリカから「area-study」というのが入ってまいりました。

辻村太郎の『文化地理学』

地理学は、そういうふうな状態で進んでいたのです。ところで、当時、辻村太郎さんのこの『文化地理学』、珍しく岩波全書から出たこの本をですね、実は昭和16年に出しておるんですが、名前が魅力的な本ですから、是非これを手に入れたいと思っておりました。なかなか手に入らない本でありましたが、ようやく手に入れたわけです。辻村先生は、地形学の大家でありますけれども、序文に書いてあるように、自分はこの方面の素養は不足しておるけれども、東京大学の理学部で人文地理の講義を受け持ったので、それに関連してこの草稿を作ったと書いておられます。全体的にちょっと期待したことと違いますが、当時20世紀の前半までのヨーロッパの地理学の傾向といいますか、どういうことをやってきたかということがよくわかる本で、便利な本だと今でもこれを大切にしておるんです。だから、知っておられる方もおられるかもしれませんが、ちょっとまあ、ご覧になってください。(本が回される)

環境決定論と可能論

それです、環境論というのが、飯塚さんのおかげで著しく肩身の狭いものになってくるわけです。当時の社会科学、特に経済学者は環境なんてものを一笑に付したのです。ところが、今日の状況を見てもわかりますが、「環境」というものが再び注目されている訳です。もちろん、「環境」と言いましても内容は全く違いますが、...

そういう状況のなかで、オーストラリアの地理学者（人種地理学）のグリフィス・テイラー（Griffith Taylor）という人が編纂しました、『20世紀の地理学』というのがあります。"Geography in the Twenties-Century"という、600ページを越える大冊であります。で、これが早くも1953年に出たということは大変力強いことであつたと思います。日本でも『人文地理』という雑誌が出だした頃で、地理の方も「社会地理」というようなものを標榜しながら立ち上がってきた頃なんですけれども、この『20世紀の地理学』というのは、やはり自然環境に非常に力点を置いておるんです。自然環境には逆らえないということを主張しています。

こういう自然環境論者のひとりに、タサム（Tatham）という人がおるんですが、この人は南極にパイナップルを栽培することはできんとか、ま、そんなようなことをいった人でありますけれども、この人は、「stop and go determinism（とどまって考え、考えてから進む）」というのを提唱しております。当時は、決定論と可能論とを相対立させて考えるという一般的な風潮がありまして、高校の教科書にもそのようなことが出ておまして、決定論はだめなんだと、可能論がいいんだと、そういう趣旨のことがずっと受け継がれておりました。しかし、実際は可能論というのはいっと批判されていいんではないかとそういう気がしますし、学問というのは、ある一定の前提の下に定言的なことを、何らかの決定理由を主張しないと学問にならないんじゃないかと思えます。

経済学などで、「ceteris paribus（他の条件が同一ならば）」という前提のもとに、いろいろな理論が構成されているのもそれでありまして、他の条件というのを十把一絡げにして同一とみなすことに次第に疑問が持たれるようになってきます。経済的に合理的に行動するホモ・エコノミクスの仮定もそれでありまして。地理学はこの他の条件が同一でないことを前提としてきたといえます。地理条件の場所的相違性、これが出発点であつたといえますが、その発展の過程は、むしろ逆方向を取るような傾向も見えました。

説明が正しいか間違っているかということはもちろん大事なことでありますけれども、可能論というのと何でも可能性だということは、何にも解答しないということと、同じなのではないかと思えます。事後的な説明であくまで行こうとすれば、それでよろしいんですけれども、何らかの意味で、その因果関係というものを説明する必要があると思うんです。こんな点で、僕はそこらのところは問題をまだ残しておると思うんですけれども...

環境論からの離脱

戦後の日本の地理学はまず、こうして環境論から離脱するという方向に動いてまいります。それで、社会科学としての地理学という方向に努力して行くわけではありますが、結果的には、環境論を捨てるとういうことになったかといえますと、場所だけは限定した他の学問ということになっていったわけですね。たとえば、特定場所を限定した「経済史」であったり、「農業史」であったり、村落の記述であったりという地方経済史的な色合いを強めて行くわけであります。

そういったなかで、もう一つは、経済統計が普及してきた、充実してきたというのが、これは戦後の非常に著しい特徴であります。国際比較や地域間比較の可能性が、数的に可能になってきたということ、それで各国の性格づけというもの、数値的な比較というものに役立ったわけですが、その中で最も貢献したのが、国民経済計算 (National Economic Accounts) であります。これは国民所得の勘定でありますけれども、この国民所得の国際比較に基づいた研究が、例のコーリン・クラーク (Colin G. Clark) の『経済進歩の諸条件』("The Conditions of Economic Progress") という書物です。これは、早くも二年後の 1951 年に翻訳が出ておるんですけれども、多くの関心を官庁エコノミスト、その他の経済学者、そういう多くの関心と呼んで、地理学にも多くの刺激が及んだわけがあります。

そういうわけで、環境論的な経済地理学というのは統計的な材料をたくさん取り入れて、統計的な比較ということが客観的にできるようになって性格を変えてきたのです。これが、大きなメリットになりましてですね、そういう経済地理学の先鞭を、日本では東京大学の経済学部におられました除野信道氏が付けられたと思います。で、いま普及しております産業三分類、第一次産業、第二次産業、第三次産業という三分類法も、コーリン・クラークの書物で普及したわけがあります。

ところで、その当時ですね、海外から入ってくる地理書というものは、概して、はっきり言いまして、戦前のものを引き継いだというような感じで、画期的な進歩というものはあまりみられなかったと、僕は思います。で、従来の「人文地理学」は「社会地理学」と看板を変えながら、まあ、実体的にはあまり変わっていないというのが事実だと思いますが、どうでしょうか。わたしの、狭い知識ではそんな感じがいたします。

ドイツから入った地理学書、これも、一般的に伝統的でありました。その中でも、日本で紹介されましたオトレンバ (E. Otremba) の『一般農業及び工業地理学』("Allgemeine Agrar- und Industriegeographie") という本ですね。これは戦前ドイツ地理学の総決算といえますか、まあそういった感じのもので、農業地理部門の研究蓄積が大きいことを示していますが、我々が期待しておったような体系的なものではなかったという感じがします。そんなような状態で、だんだんに、経済地理とか人文地理というものに利用できる統計が非常に豊富になったということは、戦後の非常に大きなメリットでありまし

た。だから、それを受けましてですね、それとその頃、戦前の地理学に対する、特に地誌ですね、「Regional Geography」に対する批判というようなものが出てまいりますんですが、いわゆる、シェーファー（Fred. K. Schaefer）などの唱える見解、計量地理学というものに至る一連のプロセスがありますけれども、ずっとその流れを、ここで今日までお話しする能力もありませんし時間もないので、特に、私は、1990年代というのはよく知らないわけで、後でいろいろ教えていただきたいと思うのですが…。

地域区分と地理学

話が、あまり系統的にできませんのでけれども、またちよつと基本的なことに戻ります。そこに回しております『文化地理学』というのを見てもわかりますように、近代地理学の成立基盤は、基本的には世界を分類する分類学なんですね。その分類学の基本を成すのが地域区分であります。学問の初期というのは、学問的考察の一番の手始めというのは、比較ということから始まるということはお存じの通りでありますね。比較から一般性というのは出てくるわけありますから、そして、法則性というものに至るわけですが、そのプロセスとして分類ということが、つまり比較して分類するということが出てくる訳です。



この辻村さんの『文化地理学』というのを見ても、ほとんどが地域分類であります。対象が何であってもかまわない訳で、宗教でも民族でも何でもいいわけですが、そこで地域区分というのが伝統的に地理学で尊重されるわけ

でありますね。わたくしは、これがはたしてどんな役に立っているかということ、若干疑問に思っております。近代の最初の頃は、世界中がよくわからん段階では、地域区分は確かに有効だと思いますが、いまの段階になって、なおかつ伝統的な地域区分の考え方がどこまで有効なのかということ若干疑問に思っております。

いつですか、『地誌学を考える』という本が、古今書院から出ておりますのを見ますと、「地誌のための地域区分の方法—日本列島を例に」という懇切な論文があります。研究者それぞれ独自の区分がありうるので、初歩的な教育や特定の研究目的で地域を抽出するには役に立つと思いますけれども、特殊な指標でない限りだいたい日本の地域区分くらいは分かっておりますから、そんなにたいした学問的意味はあろうとは思いません。それよりも、区分された全体がどういうことを示しているのかの解釈がないことに対して、かねがね疑問を持っておりましたが、この点についてご意見ありましたら、ど

うぞお聞かせください。地域を総合的にとらえるということを申しますけれども、総合とはいったい何を総合というのかをもう少し考えてみる必要があると思うわけです。

で、さっき分類学として地理学が成り立ってきたということを申しましたが、地域区分というのは地域概念に結びつき、地理学者による現実からの何らかの抽象化でありますので、その意味では私は評価するんです。ただ、類型「Typus」というものを設定するという、それから、地域の性格というものがごっちゃになっておるんじゃないかという感じがするので、地域類型というものとその現実の地域の性格というものは、やっぱり分けておかなければいけないんじゃないかという感じがするのですが、そこがどうもはっきりしてないんですね。気候区分のように、区分されたものが、即、ある種の論理性をもつ類型に、そして世界全体の気候の類型が体系的にできているという場合はですね、分類の意義があると思います。ですから、比較的うまくいっておるのは気候分類ではないかという感じがするのです。ただ、これも大気の複合現象の理論的な結びつきの中で観念的に考えられたものなんですね。ですから、地中海性気候といっても、それは一つの類型であって、特定の地中海の気候であることとは違うんですけども。ですから、日本の地域区分というものを、自然から人文まで多くの要素を組み入れたといっても、これは総合的ということですがね、どういう意味合いを持っているかということ、私は50年やってきましたけれども、今ひとつ自信がないのです、実のところ。皆さんにご意見を聞かせていただきたいことの一つでございます。

空間概念と地理学

それからもう一つ、1960年代に出てきますいわゆる空間学派の「Spatial School」というのがあります。空間概念が発達して来たというのが、地理学に限らず、文科系諸科学において一般的になるというのが、60年代、70年代の特徴であると思います。そういう点では、経済学は最も躊躇した学問、つまり純粋経済学者というのは空間経済学に対してちょっとネガティブなんです。しかし、実のところ心理学とか社会学では、かなり積極的な論者がありましてですね、正面から取り上げられるようになったという点が、これが70年代に至っての特徴であると思います。地理学はこの方面から逆に多くの刺激を受けておるということは否定できないと思います。それから、もう一つ建築学というような方面においても、空間概念というものが浸透したというか、よく取り上げられてまいりました。そういう点において、空間概念というものは、地理学で普及したというよりも、多くの学問分野で普及したという点において、もはや、これも地理学の専有物というわけにはいかないという点があります。しかし、まあ、それについてちょっとつこんでおると時間が足りませんので、また改めて…

歴史主義と空間学派

戦後の地理学に現れた二つの傾向としては、ひとつはポパーが『歴史主義の貧困』という書物で紹介していますが、あれに現れております歴史主義的方向ともいべき、それに基づく理論展開、これがマルクス主義的傾向の人に多い一つの方向であったと思います。そしてもう一つは、空間的視点、Spatial Schoolですね、空間学派と立地論も含めまして、その二つの傾向というのが、支配しておったと思います。で、この歴史主義—Historicism というのは、いろんな意味がありますが、ポパーが攻撃しているのは歴史的発展段階なんですね。要するに。だから、この次にはこういう段階になると、必然的にこうなるというそういう、それに対する、まあおおざっぱに申しますとですね、歴史主義といいますと多義でありますんですけども、ポパーが主として攻撃しているのはその面であります。段階説—発展段階説でありますね。

地政学の今日的意味

私は、さっき、地政学の話をちょっとやりかけておりましたんですが、このハンチントンの『文明の衝突』が出る前にですね、その数年前にドイツを歩いておりました、まだ統合したばかりの旧東ドイツのロシュトックという北の港町であります、そこへ行ったことがありました。ロシュトックも一寸裏道に入ると、まだ余り復興が手についていないという様子でした。たまたまロシュトックの大学の近くの本屋をのぞいておりましたら、ヨーロッパ地政学の本がありましたので、それを買ったんです。"Geopolitik Heute"という表題の、『今日の地政学』というんですね。サブタイトルにドイツ語で「Geopolitik」それから、「geo-strategy」、こういうものは低調であると、つまり無視されておる訳ですが、実際には、USAとか、イギリスとか、フランス、ソビエト—ロシア、中国というところは、そうでないんだということが書いてあります。今日、東西両ドイツが統合されて、そういう関心をないがしろにしているということは、ドイツの安全保障にとって、決していいことではないとか、関心を持つべきだということが書いてあります。つまり、ドイツの現状というものは、日本とはずいぶん違うということもわかりますけれども、ただ、東西ドイツが一緒になって万歳というわけにはいかないということをご承知の通りであります。ドイツがこれからどういう方向に向かうのかといいますと、かつての「Geopolitik」みたいに外へ向かって攻撃の触手を伸ばすということではなくて、安全保障ですね、それに重点が置かれるわけで、安全保障政策というものを考える必要がある

ということをおっしゃるわけですね。

ヨーロッパというものを考える場合にですね、ドイツのみならず、この各国間の「Geopolitik」、「geo-strategy」というものがわからないと、ヨーロッパを理解することはできないということをおもいます。ただ、経済がどうだと、あるいは住民が流入してくるとかということだけ、あるいは都市がこういうふうになりましたということだけでは、ヨーロッパというものを理解することができないという感じがいたします。そういう意味で、その知識は必要であるということをつくづく感じます。それが、日本の我々には欠落しておるといえるのか、欠落してもいい状況にあるのか、あるいは、非常に楽天的であるのかわかりませんが、そういう状況に対する研究が必要であるということをおもいます。そういうことが書いてありました。ドイツの大学における政治地理学の専門家の講座のことがちょっと書いてありますが、ドイツの大学の社会科学部門の、専門科目に、「政治地理学」とか「地政学」という部門が非常に少ないということが指摘されております。ベルリンの自由大学、ボン大学、それからジューゲン、それだけしかない。これはなにか名簿の上の調査のようではありますが。

地理学の性格に関して

さて、1985年にジョンストン (Johnston) の「The Future of Geography」という本が出ていますが、その中にハースト (Michael E. Eliot Hurst) の論文があります。ハーストの論文というのは、地理学は存在しなかったし将来もないという標題のもので、非常にネガティブなものです。この人は、ハーベイ (Harvey) の流れの人のようで、ハーベイの言うことを主に引用しています。それによれば、学問の境界というのはあまり必要ないといえるのか、固定的な学問の境にはこれからはこだわの意味はない、必要はないということをおもっています。都市の研究というのが、そういう境界の無い研究領域の一つの代表のようですね。



結局、地理学の問題としては理論が欠如しておる、ということをおもって、地理学の方法やテクニックは寄せ集めであり、借用であるので、それらを自分のものに作り替えていかねばならないといっています。要約は難しいですが、理論というのは何かといえる、いろんな法則を体系化したものが理論でありまして、そういう意味での理論が欠如しているといっています。それともう一つ、地理学の現代社会への不適性、現代社会に適切でないという側面を持っていることを指摘しています。その中で、人間の知識の中に空間というか地理学というものを導入するのに、認識論的な見地から理論化できない、ということをおもっています。難しい論理のように思われますけど....。

純粋地理学と応用地理学

その本に収録されているもう一つ、ピーター・テイラー (Peter Taylor) の論文「地理的なパースペクティブの価値」(The Value of a Geographical Perspective) が興味を惹きます。「パースペクティブ (perspective)」とは地理学的展望とか視角というんでしょうが…、この人の主張は、純粋地理学と応用地理学というものが時代によって交互に表れてくる、そういう理論です。それが、だいたい近代においては経済の循環、いわば、好況と不況といった経済状況と符合しているというようなことを言っておるわけです。地理学内部で理論化が進むときは、何と言いますか、国の経済が安泰というか安定しているときだというもので、そうすると大学に予算が多く付くというのも関係しているというわけです。不景気になると、地理学を社会に向かって売り出そうとするので、応用地理学に向かうようになる。彼によると、これまでに3つの応用地理学の時代があったと。まず一つは、19世紀末、それから二つの大戦の間の期間、そして1980年代(現在)だと。この間に純粋地理学が盛んになった二つの時期があったというわけです。この人の見通しでは、1990年代は、再び経済が成長するから、新たな方法論の投入が行われるとしています。ちょうど、1970年代に一つの方法論的な活発な議論があったのですが、それ以後は経済が鈍化したために応用地理学が盛んになる時期に入ったという骨子でした。ただ、自分としてはこの論文を読んだときに、「そうかな」と思いました。つまり、この人はイギリスのニューカッスル大学と書いてありますから、イギリスでそうだったかどうかはよくわかりませんが…。

ピーター・テイラーに関して

このテイラーという学者は、イギリス、ニューカッスル大学の教授で、多分今日の代表的な政治地理学者といえるでしょう。私の手元に、これまた、たまたま彼の"Political Geography"の第三版がありました。日本語訳もあるかも知れませんが、それは知りません。この書は初版を1985年に出して、1989年に第二版を、そして1993年にこの第三版を出しています。単なる重版ではなくて、それぞれの国際的政治情勢の変革期に対応して、補足・改訂が行われてきたようで、この第三版は冷戦終結後の世界情勢の一大変革に対応してかなり大幅に書き直されたようですが、残念ながら、旧版と比較することができません。彼は1989～91年の世界の政治情勢を地政学的移行期と称し、グローバルアプローチの必要性がいっそう強まったと述べています。

今日の社会科学の課題に、全世界的に、地球的問題がありますが、テイラーはこの書で現在の状況のユニークネスを強調せんとするのではなく、今日のこのグローバルな問題と論点は過去のプロセスに光をあてることによるのみ考えられると述べ、グローバルな関心を彼は過去にたどっています。

更に彼は、いまひとつウォラーステインの世界システムアプローチを、政治地理学の

主題を秩序づけ、理解するのに最も有効であるとして、これを採用するというもので、コア (core) とペリフェリー (periphery) の問題になります。

こうしてこの書は世界システムアプローチを採用していますが、そこに歴史的システムの次元が重要になっています。

第二章で地政学はよみがえる、というか、よみがえった地政学と題して、地政治 (学) の世界秩序の長期サイクルについて論じています。

"Future of Geography"の中で述べている純粋地理学と応用地理学の相互の発展の波動も、彼の政治地理学で展開する議論と同じ発想です。

テイラーのこの書は、私が久しく政治地理学の書物や研究に接しなかつただけに興味を引くものでした。地理学以外の人にも読める書であると思います。

応用地理学とホーリズム

ところでテイラーは、応用地理学とは、19世紀末の不況が始まってプロシアで創り出されたものと言ってます。この「応用」とは何かというと、教員養成のための地理学、政治的な地理学、商業地理学、植民地地理学というようなものだ。つまり、植民地統治時代の植民地政策に貢献するべく発展したのです。帝国主義時代の地理学とは、そういう手段になったわけですね。

ところが、その一方で、方法論的な検討が行われていって、純粋地理学の側面では、地域概念とか地域的総合という概念が発展して、20世紀初頭における新しい地理学の基礎をつくった。それは、たとえばドイツでは、「Landschaft」、イギリスでは「natural region」、フランスでは「pays」です。その場合の地理的な哲学はホーリズムに基礎をおいていました。その後、世界大戦間の不況によって、より有効性が要求されるようになり、理論は脇に押されて応用へ傾いていったわけです。その代表的な例が、「政治地理学」、ドイツで Geopolitik に変容していったものであり、イギリスでは土地利用調査が盛んに行われ、それを地理学者が行うようになったんです。スタンプ (L. D. Stamp) が代表的です。他の国でも、国土計画というものに地理学者が貢献するようになりました。その流れに挑戦するように純粋地理学を提唱したのが、ハーツホーン (Richard Hartshorn) でした。つまり、彼の地理学方法論は応用地理学に対抗する純粋地理学だったというわけです。

ホーリズムへの批判と空間学派

ところが、戦後、ホリスティックな地理、ホーリズムの哲学に対する不信が起こる。すなわち、ホーリズムを代表する地誌に対する攻撃が、1960～70年頃生じます。ここで、第二の純粋地理学の時代が始まるのです。そういう中で出てきた人として紹介されているのが、シェファーです。彼は、ハーツホーンに対する批判、つまり、イデオ

グラフィックなものに対するノモセティックなものを発展させる新しい理論構築を主張するわけです。そこに、新しい理論構築として出てきたのが、空間学派「Spatial school」であり、それを経て計量革命に到達するわけです。この辺はちょっとピンとこないのですが、アメリカやイギリスでは、空間学派は空間の専門家として応用的側面に進出し、経済の後退に伴って応用地理学に向かった。空間学派は、空間分析家として実践面、実務面で貢献したということです。

空間学派への批判とラディカル、ヒューマニスティック

そうするうちに、もう一度、またこんどは、これに対する反論が生じてくるわけですね。それは、ハーベイ (Harvey) の再検討で、空間的視点に対する批判的なものです。ハーベイはラディカルな系統のグループですが、それとは別にヒューマニスティックな視点からの批判もありました。結局、空間学派と、humanistic-geography のグループと、radical なグループ、の3つに分かれたというようになってきたんです。これが1980年代の状況でした。しかし、いろいろ批判はあるものの、第二の純粋地理学は空間学派で、それは今も生き続けていますが、次の純粋地理学を待望しているということです。

では1990年代はどうかというと、第三の純粋地理学が発展するためには、名声のある大学で、自立的研究をするのが一つの条件だというようなことを言っているんです。しかし現状は、大学の自立性というのがだんだんと後退している状態で、ビジネススクールとか、あるいは研究機関とか、大学以外のところが成長している。研究のプロジェクト作業が外郭団体で行われていて商品化している。

今の社会については、メディア社会とか、第三世界の貧困とか、いろいろなことを言っておりますが、テイラーの純粋地理学と応用地理学の循環の基本的な考え方は一貫していると言えます。ただ、1990年代については自分は知らないので、皆さんに教えて欲



しいと思います。バブルの時に純粋地理学が発展したのか、そのあたりはどうなっていますか。1990年代は経済が停滞して応用地理学方面に向かっているのでしょうか。

システム論について

最近は、「Geography」の問題意識が希薄になってきているというか、わかりにくくなってきているような気がします。アエラのムックシリーズの『地理学がわかる』（朝日新聞社）とか、そういったものを見ていますと、その時々流行している言葉を持って来る、たとえば、情報・行動・システム論を安易にくっつけているといった傾向があるように思われます。中味から出てきたものか、ただ表面的にかわかりませんが、その時々言葉をやうまく利用しながら地理学というのは生きてきた側面がうかがえます。

その一つに、地域システム論とか空間システム論という表題が見られるわけですが、もっとつつこんで、新しい領域の可能性を探る必要があると思います。日常的な場面でシステムという言葉をつまみ「〇〇システム」、「システム〇〇」というふうにするのは構わないのですが、それを書物の表題に付けるとなると、もっと「空間システム」とは何かをつつこむ必要があるのではないかとことです。たとえば、社会学では早くからシステム論が正面からかなり論じられておるわけです。ルーマン (Luhmann) の『社会システム論』があって、ああいう学問になると一つの流れがあって、空間が主流テーマではなかったが、空間という考え方は普及しました。「人間の空間」とかいろいろありますが、それらが生じてきたわけです。ほかに、パーソンズ (T. Parsons) の『構造機能的システム理論』なんかもありますね。地理学はシステムという言葉は使うが、まだ、つつこみが不足しているという感じがします。

またパラダイム論というのがあって、トーマス・クーン (T. S. Kuhn) の科学哲学に見られるのですが、「科学革命」といわれるものです。システム理論というのは、科学革命の一つと考えると、ホーリズムに基づく地理的総合、地理的複合体にシステム論がとってかわることができるのかを明確にすべきでしょうね。地理学というのは、初期において自然科学的方法の一つに、あるところでは物理学、あるところでは生物学的有機体論など、に負ってきているわけです。それに対してホーリズムがある。それがパラダイム転換によって、システム論に移行する。このあたりを明確にすべきだと思うわけです。

『地理学がわかる』ように！

ちょっと補足しておきますと、先のパーソンズの『構造機能的システム論』の影響を受け、それを批判したのがニコラス・ルーマンです。これは私の感想ですが、社会学では基本的に「社会行為」「相互行為」というものがある。それが媒体、組織力となっている。地理学では、それを空間つまり Spatial なものに置き換えようとしている、いわば構造的なものにどうか、しかし成功しているのでしょうか、それとも途上にある…。

『地理学がわかる』の最初に「国際化時代の空間情報科学」というタイトルで地理学を位置づけている部分があります。それを地理学への誘いとしています。この本を初め

て読む人にとって重要なところですが、内容を見ますと古代のギリシャとかローマとかの話は出てきますが、今どうするということが必要かは書いていません。また、空間情報に関するいろんな機関があることも書いてあるのですが、問題は、地理学者以外の人が用意してくれた空間情報を地理学者がどのようにするか、ということですね。

またあの本には、「地理学の2人」と銘打っているような地理学者、つまりいろんな分野が挙げられているのですが、それらがどう体系化するのは分からない、つまり枠組みの部分はありません。

90年代の地理学はどうなってるんでしょうか。1990年代にあのような『地理学がわかる』という本の出たこと自体が、90年代の地理学のわかりにくさの現状を象徴しているのではないかと思います。だから、空間情報学とかGISとかそういうものを使ってだんだん煙に巻かれているというか。GIS（地理的情報システム）にしても、GIS自体が地理学なのではなくてGISから何をどうするのか、そこからが研究なのでしょうがね。

終わりに

地理学の専門的な細分化については、日本だけではなく、世界中で進む傾向があります。しかし、それでも地理学に集約できるか問題があるわけです。これは、だれの危機感かは思い出せないんですが…。地理学は多くの特殊領域を包含する、緩い集合体で行くのではないか、緩く包摂しているのではないかという考え方が支配している、と思います。しかし、細分化されたもの相互の結びつきはなく、一つの環をなしているわけではない。『地理学がわかる』を見てもそう解釈せざるを得ないですね。

今日の話は、90年代はよく分からないという前提のもとに、戦後の50年間の流れを振り返ったものです。まあ、初歩的なことに終始しましたが、私の素朴な疑問を提出して、これからの世紀を担う皆さんのご意見をうかがいたいと思います。では、このあたりでひとまず終わりにさせていただきます。

〔付記〕

本文中の「小見出し」は、編集作業を行った川端が便宜的に付けたものである。